

先日<sup>せんじつ</sup>は、誕生日<sup>たんじょうび</sup>のお祝い<sup>いわ</sup>のメッセージ<sup>おお</sup>を多く<sup>かたがた</sup>の方々<sup>いただ</sup>から頂き<sup>わたし</sup>、私<sup>われ</sup>はとても嬉しかった<sup>ほんとう</sup>です。本当にあ  
 りがとうございました。再び<sup>ふたたび</sup>公開<sup>こうかい</sup>ミサが中止<sup>ちゅうし</sup>されている今<sup>いま</sup>の状況<sup>じょうきょう</sup>の中で、思い<sup>なか</sup>もかけなかつたプレゼン  
 トやメッセージ<sup>とお</sup>を通して、私<sup>わたし</sup>は新たな力<sup>あらか</sup>をも頂き<sup>ちから</sup>ました。実は、再び<sup>いまた</sup>緊急事態<sup>きんきゅうじたい</sup>宣言<sup>せんげん</sup>が発令<sup>はつれい</sup>された時<sup>とき</sup>、  
 公開<sup>こうかい</sup>ミサまで中止<sup>ちゅうし</sup>するつもり<sup>いろいろ</sup>はありませんでした。しかし、色々<sup>かんが</sup>なことを鑑<sup>かんが</sup>みて、ミサ<sup>ちゅうし</sup>の中止<sup>き</sup>を決めざる  
 を得<sup>え</sup>なくなり、私<sup>わたし</sup>の心<sup>こころ</sup>はとても重<sup>おも</sup>かったです。昨年<sup>さくねん</sup>の3月<sup>さんがつ</sup>からほぼ毎日<sup>まいにち</sup>、私<sup>わたし</sup>達<sup>わたしたち</sup>はこの病気<sup>びょうき</sup>についての  
 さまざま<sup>さまざま</sup>な情報<sup>じょうほう</sup>を耳<sup>みみ</sup>にしてきました。そして6月<sup>ろくつき</sup>になってようやく<sup>ようやく</sup>公開<sup>こうかい</sup>ミサが再開<sup>さいかい</sup>でき、待降節<sup>たいこうせつ</sup>からは申し訳  
 ありませんでしたが、各地区<sup>かくちく</sup>に典礼奉仕<sup>てんれいほうし</sup>をもお願い<sup>ねが</sup>い致<sup>いた</sup>しました。でも、再び<sup>ふたたび</sup>ミサが中止<sup>ちゅうし</sup>され、去年<sup>きょねん</sup>から  
 色々<sup>いろいろ</sup>工夫<sup>くふう</sup>した対策<sup>たいさく</sup>までが空<sup>むな</sup>しくなったような気が<sup>き</sup>しました。その中<sup>なか</sup>で、もう耳<sup>みみ</sup>に慣<sup>な</sup>れている「不要不急<sup>ふようふきゅう</sup>」  
 という言葉<sup>ことば</sup>が私<sup>わたし</sup>の心<sup>こころ</sup>を痛<sup>いた</sup>めました。その痛<sup>いた</sup>みは「そうか、今<sup>いま</sup>私<sup>わたし</sup>は、いや、今<sup>いま</sup>まで私<sup>わたし</sup>は『不要不急<sup>ふようふきゅう</sup>なこ  
 と』をや<sup>おも</sup>ってきたのか。」という思<sup>いま</sup>いでした。そして「今<sup>じょうきょう</sup>、こ<sup>ふようふきゅう</sup>ういう状<sup>じょうきょう</sup>況<sup>ふようふきゅう</sup>だから、ミサは不要不急<sup>ふようふきゅう</sup>なも  
 のとな<sup>うたが</sup>ってしまったのか、それとも、そもそも不要不急<sup>ふようふきゅう</sup>なものだ<sup>こころ</sup>ったのか。」という疑<sup>しゅう</sup>いまで心<sup>しゅう</sup>に生<sup>しゅう</sup>  
 じてしまったのです。そんな憂鬱<sup>ゆううつ</sup>な気持<sup>きも</sup>ちのさなかに頂<sup>いただ</sup>いた皆<sup>みな</sup>さんからのメッセ<sup>わたくし</sup>ージは、私<sup>あた</sup>に新<sup>あた</sup>しい力<sup>ちから</sup>  
 を与<sup>あた</sup>えてくれました。そして、公開<sup>こうかい</sup>ミサも大<sup>だい</sup>事<sup>じ</sup>なことですが、先<sup>ま</sup>ず、私<sup>わたし</sup>たち<sup>こころ</sup>の心<sup>こころ</sup>をも<sup>あ</sup>っと新<sup>あ</sup>たにするこ  
 とが必<sup>ひつ</sup>要<sup>よう</sup>だと思<sup>おも</sup>うようになり、今日<sup>きょう</sup>は、それ<sup>しん</sup>について信<sup>しん</sup>者<sup>じゃ</sup>の皆<sup>みな</sup>さんと共<sup>とも</sup>に考<sup>かん</sup>えたいと思<sup>おも</sup>います。

先<sup>せん</sup>々<sup>せん</sup>週<sup>しゅう</sup>と先<sup>せん</sup>週<sup>しゅう</sup>の主<sup>しゅ</sup>日<sup>じつ</sup>、私<sup>わたし</sup>たちは御<sup>み</sup>言<sup>ことば</sup>葉<sup>とお</sup>を通してサムエル<sup>さま</sup>やヨナ<sup>さいしよ</sup>、また、イエス<sup>よにん</sup>様<sup>でし</sup>の最<sup>さい</sup>初<sup>しよ</sup>の4<sup>よにん</sup>人<sup>でし</sup>の弟<sup>でし</sup>子<sup>し</sup>  
 たち<sup>か</sup>につ<sup>か</sup>いて聴<sup>き</sup>きました。彼<sup>かれ</sup>らは皆<sup>みな</sup>、神<sup>かみ</sup>様<sup>さま</sup>やイエス<sup>さま</sup>様<sup>したが</sup>に従<sup>みちび</sup>い、それ<sup>か</sup>ぞれイスラエル<sup>みちび</sup>を導<sup>か</sup>いたり、二<sup>に</sup>ネベ  
 を回<sup>かい</sup>心<sup>しん</sup>させたり、イエス<sup>さま</sup>様<sup>し</sup>の使<sup>かみ</sup>徒<sup>さま</sup>として神<sup>かみ</sup>様<sup>あ</sup>の愛<sup>い</sup>と慈<sup>いつく</sup>し<sup>あ</sup>みを証<sup>あ</sup>ししたりした人<sup>じん</sup>物<sup>ぶつ</sup>な<sup>か</sup>のです。でも、彼<sup>かれ</sup>らは  
 そうい<sup>しん</sup>った信<sup>しん</sup>仰<sup>こう</sup>の模<sup>も</sup>範<sup>はん</sup>とな<sup>ま</sup>る前<sup>ま</sup>、先<sup>ま</sup>ず自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>たち<sup>すべ</sup>の全<sup>た</sup>てを、例<sup>たと</sup>え<sup>か</sup>、家<sup>か</sup>族<sup>ぞく</sup>や財<sup>ざい</sup>産<sup>さん</sup>、また、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の考<sup>かん</sup>えややり  
 方<sup>かた</sup>まで捨<sup>す</sup>てね<sup>かみ</sup>ばなりませんでした。そして、ひた<sup>かみ</sup>すら神<sup>かみ</sup>様<sup>さま</sup>とイエス<sup>さま</sup>様<sup>こえ</sup>の声<sup>こえ</sup>に耳<sup>みみ</sup>を傾<sup>かたむ</sup>け、その導<sup>みちび</sup>きや教<sup>おし</sup>え  
 に従<sup>したが</sup>ったのです。実<sup>じつ</sup>は、それ<sup>しん</sup>こそが信<sup>しん</sup>仰<sup>こう</sup>の道<sup>みち</sup>への第<sup>だ</sup>一<sup>い</sup>歩<sup>っぽ</sup>に違<sup>ちが</sup>いないし、最<sup>さい</sup>後<sup>ご</sup>まで続<sup>つづ</sup>くべき一<sup>い</sup>歩<sup>っぽ</sup>でもあると  
 思<sup>おも</sup>います。私<sup>わたし</sup>たち<sup>つね</sup>も常<sup>しせい</sup>にそ<sup>しん</sup>うい<sup>こう</sup>う姿<sup>みち</sup>勢<sup>あゆ</sup>をも<sup>めく</sup>ってこの信<sup>しん</sup>仰<sup>こう</sup>の道<sup>みち</sup>を歩<sup>あゆ</sup>める恵<sup>めぐ</sup>みを祈<sup>いの</sup>り求<sup>もと</sup>め、それ<sup>たも</sup>を保<sup>たも</sup>たなけれ

ばならないと思います。

今日の福音で、イエス様は安息日に会堂で教えておられた時、悪霊に取りつかれていた人を解放してくださいました。その時彼と一緒にいた人々は、イエス様が律法学者のようではなく、権威をもって教えられることに驚きました。普通、安息日の集いでは聖書が読まれた後、ラビという律法の専門家がその御言葉を説明したりするのですが、その日はイエス様がその御言葉を説明なさったようです。そこで、汚れた霊に取りつかれていた彼はイエス様のその権威ある教えを聞いて、突然、声を出して自分をあらわにしました。彼は「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」と叫んだのです。ここで、二つのことを信者の皆さんと共に黙想したいと思います。

まず、会堂にいた人たちがイエス様の教えから感じた権威とは何かについてのことです。彼らがイエス様から権威を感じたというのは、逆に言うと、律法学者たちからは権威を見つけられなかったということでしょう。きっと、ラビや律法学者たちは自分が学んだこと、自分なりに研究したことなどを、昔からの習慣通りのやり方で教えていたはずで、それは律法や規則についての説明で、それに伴う罪や罰が主なテーマでした。しかし、当時、律法は一部の上級の人たちが学べるもので、それを学べる機会もお金も恵まれなかったほとんどの人たちにとって、律法は高根の花にすぎないものでした。その人たちは自分の思いにかかわらず、自分も知らないうちに、罪人と定められたのです。ですから、会堂で聞く律法学者たちの教えからは、慈しみ深い神様とか、憐れみと愛に満ちておられる神様には出会えなかったのです。むしろ、怖い権威と高圧的な教えから、人々は自分たちがいつも監視されたり、咎められたりする気持ちだけが感じられたはずで、それに比べてイエス様には特別な権威が感じられたのでしょうか。そのイエス様の権威とはどのようなものでしょうか。それは愛と慈しみ、憐れみに違いありません。そのイエス様の教えから、人々は温かい神様、人を見守ってくださる神様、人を愛し、また、生かしてくださる神様に会えたでしょう。それがイエス様の権威だったのです。しかし、そこに汚れた霊に取りつかれていた人がいて、

かれ ねた きよひかん み さま おおごえ さか はじ  
彼は妬みと拒否感に満ちて、イエス様に大声で逆らい始めました。

その霊はイエス様を知っていたのに、それに従おうとはせず、むしろ、自分を「かまわないでくれ。」と、イエス様に命じました。その話から私たちは、その汚れた霊が「人を苦しめる霊、人を強いる霊、人を虐げる霊」であったことが分かります。その汚れた霊は人間を、愛と慈しみの神様ではなく、本に書いてある律法や規則の文字に従わせる霊で、人が神様の愛に出会って解放されることを妨げたかったに違いありません。ですから、イエス様の権威、即ち、神様の愛と慈しみの御言葉を聞いて、逆に、イエス様が自分を邪魔する方だと知り、強く反発したのです。イエス様はその汚れた霊を叱り、そして追い出し、その人を悪霊から解放してくださいました。こうしてイエス様は人の命を守り、また、生かしてくださいました。さる神様の愛を証しされたのでしょうか。

今日の第1朗読では、神様はご自分の民のために新しい預言者を立て、彼がモーセのように神様の御言葉を語るようになるとおっしゃいました。でも、人々は神様から遣わされた多くの預言者たちの声に耳を傾けようとしませんでした。そこで、神様は最後にご自分の独り子であるイエス様を遣わされ、あらゆる時代のすべての人をご自分のもとに立ち返らせようとしたのです。私たちも同じようにイエス様の教会で、特に、ミサの中で神様とイエス様の御言葉を聞き、イエス様の愛の御業に与れるわけです。ですので、教会は温かくて慈しみ深い神様に出会うところであること、そして、ミサはその神様を示してくださいます。イエス様との出会いの時間であることは言うまでもないことでしょう。自分の考えややり方、形式や規則、先入観、偏見などの汚れた霊のようなものに取りつかれてしまったら、それは何と哀れなことでしょう。今日の第2朗読で、使徒パウロは結婚に例えて信仰生活について語っていますが、私たちは信仰のある人としての品位を保つべきです。その品位とは愛を通して表わされるもので、私たちの信仰の証でもあります。互いに忍耐し合い、励まし合い、愛し合うことによって、皆が共に、この信仰の道を最後まで歩めるようになるのです。教会に愛がなければ、私たちのミサはもはや「不要不急」なものとな

ってしまうに違ちがいありません。信者しんじやの皆みなさんとの公開こうかいミサができる日ひを待まち望のぞみながら、その日ひまで、神かみ  
様さまが私わたしたち一人一人ひとりひとりを愛めで満みたして下さいるよう、お祈いのりいたします。